

急速な時代の変化を先導する日本診療放射線技師会へ

児玉 直樹

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長



社会の変化は、いま加速度を増しています。人口減少と少子高齢化は、地域の暮らし、医療需要、そして医療提供体制そのものを大きく変えつつあります。病院完結型から地域完結型へ、入院中心から外来・在宅・介護との連携へ、さらに医療DX、人工知能（AI）、タスク・シフト/シェア、働き方改革へと、医療政策も大きく動いています。厚生労働省の施策もまた、2040年を見据えた医療提供体制の再構築へとかじを切っています。こうした変化は、単なる制度改正ではなく、私たち医療専門職の役割と責任を問い直すものです。医療経営の環境も厳しさを増しています。人材確保、物価高騰、設備更新、診療報酬への対応、病床機能の見直しなど、各医療機関はかつてない難題に直面しています。診療放射線技師も例外ではありません。画像診断、放射線治療、核医学、IVR、安全管理、被ばく線量管理、医療情報、研究と教育、さらにはチーム医療における役割拡大まで、求められる力は確実に広がっています。だからこそ、私たちは社会の変化から目を背けてはなりません。

こうした中、厚生労働省では「医療関係職種の安定的な養成・確保に関する検討会」が開催され、地域において必要な医療関係職種を将来にわたり安定的に養成・確保するための方策が議論されています。検討会の資料では、18歳人口の減少に伴う養成校の定員充足率の低下や、医療従事者確保の困難さが課題として示されており、診療放射線技師も医療関係職種の一つとして明記されています。これは、私たちの職能団体が社会から必要とされ続けるために、養成、確保、定着、働く環境、専門性の発揮を一体として考える時期に来ていることを意味しています。ピーター・ドラッカーは、「乱気流の時代における最大の危険は、乱気流そのものではなく、昨日の論理で行動することである」と述べたとされています。これは、まさに今の医療界に向けられた言葉のように響きます。変化を恐れること自体が問題なのではありません。問題は、変化を理解しようとせず、昨日までの経験だけで明日を判断してしまうことです。これまで培ってきた知識や技能、職業倫理は、決して古びるものではありません。しかし、それらを守るためにも、社会の変化に応じて学び直し、役割を更新し続ける姿勢が必要です。

経験を重ねた世代の責任は大きいです。若い診療放射線技師は、AIやデジタル技術、働き方の多様化、他職種連携の新しい形に対して柔軟な感性を持っています。その芽を、過去の常識や慣習だけで摘みではなりません。年長者の役割は、若手に「変わるな」と言うことではなく、変化の中で専門職としての軸を失わないよう支えることです。経験とは、変化を止めるための重しではなく、変化を正しい方向へ導くための羅針盤であるべきです。もちろん、変化に迎合するだけでよいわけではありません。診療放射線技師が大切にしてきた医療安全と精度管理、患者中心の姿勢、科学的根拠に基づく実践は、これからもゆるがせにはなりません。しかし、その価値を社会に届け続けるためには、新しい技術、新しい制度、新しい地域ニーズを読み解き、自ら行動することが不可欠です。AIが発展しても、最終的に患者に向き合い、画像の質と安全を担保し、医療チームの中で判断と責任を果たすのは人です。その「人」としての専門性を高める努力こそ、私たちの未来をつくります。

診療放射線技師が取り残されるか、変化を先導する存在となるか。その分かれ目は、制度や技術の側にだけあるのではなく、私たち自身の姿勢にあります。変化を嫌うのではなく、変化を見極め、学び、語り合い、行動する。職能団体として、教育、研修、情報発信、政策提言を通じて、会員一人一人が一步前へ進むための環境を整えていく必要があります。世代を超えて互いに尊重し、若手の挑戦を支え、経験者の知恵を生かす。そのような職能集団であり続けることが、これからの医療における診療放射線技師の価値をさらに高める道であると確信しています。